

2025
No. 50

道



The Annual Magazine of Seirangakuin Theological Seminary

西南学院大学 神学部学生会

彼は私たちの背きのために刺し貫かれ 私たちの過ちのために打ち砕かれた。
彼が受けた懲らしめによって 私たちに平安が与えられ
彼が受けた傷によって
私たちは癒された。

(イザヤ53章5節)

西南学院大学神学部報『道』をご覧の皆さま、主の御名を賛美いたします。

この度、巻頭言の筆を執るにあたり、ヘンリ・ナウエンの著作『傷ついた癒やし人』を読み返しました。ナウエンは、現代の牧会者が、自身の傷や弱さを隠すのではなく、それを通して他者の苦しみに寄り添うべきだと説いています。この思想は、神学を学ぶ私たちの道が、「傷ついた癒やし人」としてどのように歩むべきか、その本質を問い直すものです。

私たちは皆、それぞれの人生において、様々な傷を抱えています。それは、失敗や挫折、孤独、そして信仰の疑いかもしれません。ナウエンは、この傷こそが、他者の傷に寄り添い、共感するための入り口となると言います。神学部での学びは、単に聖書の知識を深めるだけでなく、私たちが抱える傷や弱さを、神の恵みによって他者への癒やしへと変えていくことを求められます。

私たちは、神学部・神学寮・研修教会で知的に、そして霊的に探求する中で、自分自身の内なる葛藤と向き合います。この葛藤は、私たちの弱さを露わにしますが、同時に、その弱さの中にこそ神の力が働くことを発見させてくれます。ナウエンが言うように、「恵みは、弱さの現れる場所に最も強く輝く」のです。

『傷ついた癒やし人』は、私たちが将来、牧会者として、他者の苦しみにどのように向き合うべきかを教えてくれます。人々は、立派な言葉や完璧な答えを求めているのではなく、ただ「自分の苦しみに寄り添ってくれる人」を求めているのかもしれません。

神学寮や学校、教会での交わりは、この共感の訓練の場です。私たちは、ここで互いの痛みや葛藤を分かち合い、支え合うことを学びます。この経験は、将来私たちが人々の話に耳を傾け、彼らの傷に寄り添うための、かけがえのない土台となります。

私たちは、この西南学院大学神学部で、ナウエンが説く「傷ついた癒やし人」として歩むための準備をしています。それは、自分自身の傷と向き合い、それを隠すことなく、むしろその傷を通して神の恵みを証しする道です。



目次

巻頭言 「傷ついた癒やし人として」	2025年度 学生会会長 大野 学	1
-------------------	-------------------	---

教員からのメッセージ (学部長から五十音順)

献身を考えておられる皆さんへ	日原 広志	4
寮監になって	金丸 英子	5
神は人を「雄と雌」＝ 「雄から雌までの様々なグラデーション」に創造した	須藤 伊知郎	6
日系アメリカ人の強制収用とリドレス運動	才藤 千津子	8
変わるところから、変わる (時が良くても悪くても)	濱野 道雄	9
「振り返り、見通して」ー アジア青年平和学校七年の歩み ー	黄 南 徳	10
「ときどきご機嫌です。不思議です。」	藤方 玲衣	11

特集記事

佐賀バプテスト教会での研修	大野 学	12
汝矣島浸礼教会訪問を通して	渡辺 鷹優	13
「合同教会」である日本基督教団と 私の課題	今井 牧夫	15
京都バプテスト医療団研修	長尾 基詩	16
他教派から見たバプテスト	伊藤 健一	18

神学生紹介

<最終学年>

神学部神学科選科3年	石 原 誠	19
------------	-------	----

<在校生>

大学院神学研究科博士課程前期1年	長尾 基詩	21
神学部神学科選科2年	大野 学	22
神学部神学科4年	伊藤 健一	23

<新入生>

神学部神学科1年	渡辺 鷹優	24
----------	-------	----

<リカレント生>

今井 牧夫	25
-------	----

編集後記	26
------	----

献身を考えておられる 皆さんへ

2025年度 神学部長 神学部教授 日原 広志



1. あり得ない献身

- (1) 献身は自己中心から神中心への転換です。自己実現、自己陶醉、自分探しの献身はあり得ません。諸教会・伝道所の祈りと奨学金と、ご自分の人生とを費やす以上、勿体無い歩みをするのはやめましょう。「入学前の自分のまま、知識のみ増やす」「聖書本文を黙らせ、自画像を読み込む」などは、教会の献金を使わずとも、地元でもできる筈です。
- (2) 頭だけの献身はあり得ません。献身とは全人的なものです。自分の教会にどっぷり頭まで漬かって生活した数年間を持たない者は、その教会でこそやるべきことがある筈です。からだは神学校では作れません。からだは教会でしか育たないのです。
- (3) ひとりぼっちの献身はあり得ません。キリストのからだなる教会の肢体としての献身です。たとえ召命体験において神－我の1：1の関係が強烈に刻印されたとしても、基層には教会の長い祈りの歴史が存在します。教会員から「キリストのからだを引きちぎられる傷みに耐えて送り出す、私たちの教会の献身だ！だから私たちは直言し、あなたの献身を吟味する！」という嬉しい試練を経る者は幸いです。「ひとりぼっちの真打登場」型献身ではなく、「教会の献身が偶々我が身に生起した」者として復活しましょう。

2. どのような心構えで学ぶべきか

- (1) 主語は神。要／不要を決めるのも神です。上級生から「関心ある方は是非ご参加下さい」とアピールされたら、「関心ない自分だからこそ在学中に参加しておかねば！」と思ひましょう。
- (2) 完全に理解するまでは最終的判断を下さないようにしましょう。「神学は下らない」は怠け者の言い訳です。諸教会はそんな台詞を聞きたくて3-4年間あなたを支えるものではありません。
- (3) 砕かれと再構築を恐れなくてください。神学校の裏カリキュラムは神による砕かれです。
- (4) 神学部と研修教会と寮生活は三本の柱です。一つを他2つへの言い訳にすると全体が崩れて行きます。あなたが3人ではないように、この三本の柱も相互に関連しています。自己管理能力を磨きましょう。
- (5) 教会、教会員、牧師を舐めてはいけません。学ぶのはあなたです。
- (6) 剽窃をしてはいけません。
- (7) 共に神から学びましょう。神と聖書についての答えを握り自己絶対化するために学ぶものではありません。相対的限界性の中に留まる忍耐を身に付け、「聖書も神の力も知らないから」「思い違いをしている」(マコ12:24) 者として、活ける神から学んで下さい。

主は生きておられます。安心して下さい。

寮監になって

神学部教授 金丸 英子



私の手元にボツにした「道」の原稿がある。それは寮監となってすぐの時期に書かれたものだ。以下はその原稿である。

今年（2021年）の4月から神学寮の寮監になった。赴任直後から寮監の任にあった濱野道雄先生が学部長になられたので、その後任となる。両親の介護で夫が転居したことに伴い、単身赴任の身となったので、教授会に神学寮に住まわせていただけないかと訊ねたところ、寮監を引き受けることを条件に許可が出た。「住み込み」の寮監と言っても家族寮に住んでいるので「寮の集団生活」感はなく、一人暮らしの静かな生活である。そのため、時々寮に住まっていることを忘れるほどであるが、それでも日々、神学生の生活の気配は感じることができる。主日の朝や水曜日の夜、駐車場の車が出払っているのを見れば、「みんな教会に出かけたのだな」と思い、夜半に響く足音を聞けば、「まだ起きて精を出しているな」と思う。家族寮の子どもたちの声が聞こえるのがいい。神学寮には「どうぞの机」という素晴らしいシステムがあって、到来物などを寮生全体で分かち合えるようになっている。それが日々減ってゆくのを目にするのも楽しい。管理人の田中さんご夫妻は、食事の準備から、生活環境の整備と管理、大学の関係部署との連携、学生の見守りまでをよく労してくださる。神学寮の中庭は、寮父の幸男さんの手によって、花と緑で満ちる癒しの空間となっている。身内最良ではないが、神学寮は簡素ながら生活の必要が満たされた学びのためのよい環境だと思う。それだけに、多くの空室を抱えているのは勿体ない。

神学寮では、学期中の毎週火曜日から金曜日の朝食前に15分間の朝の礼拝が行われる（ある教員はこれを「肉の糧より霊の糧」と表現した。心の中で思わず唸ってしまった）。朝の礼拝は、単身寮・家族寮にかかわらず寮生全員に開かれており、寮監の職務範囲ではないが、私もコミュニティーの一員としてコロナ明けの対面の集まりが可能となった時期から出席するようにしている。寮生が寮監（教員）の出席をどう受け止めているか知る由はない。しかし、住み込みの寮監としての教員にとっては得難い経験である。一日の定まった時間に集まって顔を合わせ、同じ使命に呼び出された者同士が神の前に座り、共に聖書に耳を傾け、祈りの課題を共有して共同体の祈りの時間を持つことは他に代え難い。きっとこの経験は、恵みの宝となって私の中に残ることだろう。教室では知ることのない学生の素顔を垣間見るのも嬉しい。復活の主が「学生の生活にもっと心を寄せ、学生のためにもっと祈るように」と求めておられるのだろう。

以上である。来年3月末には寮監の任を解かれるが、想像通り、退職後にはきっと神学寮の生活を懐かしむに違いない。

神は人を「雄と雌」＝

「雄から雌までの様々なグラデーション」に創造した

—2025年9月16日

女性牧師・主事の会主催研修会「聖書は女性を嫌ってる？」より

神学部教授 須藤 伊知郎



「キリストの中へとすっかり沈められたあなた方は皆、キリスト〔の中に入ってそれ〕を着たのである。その中にはユダヤ人もギリシア人もない。その中には奴隷も自由人もない。その中には雄と雌はない。というのはあなた方は皆、キリスト・イエス〔の中〕において一人だからである。」

(ガラテヤ書3章27-28節)

この言葉はバプテスマの際に唱えられた定式で、男女が平等に活動していた原始キリスト教最初期の宣教運動から生まれました。その男女が平等な宣教活動は元を辿ればイエスの宣教、彼の周りに集められた平等な弟子集団が行なった伝道活動に促されたものと思われます。彼ら／彼女らがその平等性を言葉にする時に創世記1章27節の言葉づかいと神話的な表象が用いられました。

創世記1:27は、神は人格的な関係性そのものである、人はその人格的な応答関係に生きるべく創造されたのだという宣言です。

「そして神は人を彼の^{かたち}像に神の像に彼を創造した。雄と雌に彼らを創造した。」

ここで普通は「男と女に創造した」と訳される言葉は、直訳すると「雄と雌に創造した」です。「男と女」のあれかこれかということではありません。これは、生物学的に見て両端が雄と雌の幅広い全体を創造した、という意味です。これは聖書によくある語り方、修辞技法でMerismusといいます。たとえば、「初めに神は天と地を創造した」とありますが、天と地だけ、両端だけを創ってその間は空っぽというわけではありませんよね。「天と地」は両端を言って、その間を含む全体を表しているのです。あるいは、「私はアルファでありオメガである」、最初と最後だけなのではないでしょうか。そうではありません。「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」と続きます(黙1:8)。主なる神は時の初めから終わりまで一切を包含しておられるということです。新約からもう一つ例を挙げると、「〔神は〕その太陽を邪惡な者たちと善い者たちの上に登らせ、義しい者たちと義しくない者たちの上に雨を降らせる。」神はすべての者の上に太陽を登らせ、雨を降らせてくださる、と言うのです。神は人をその^{かたち}像に、雄と雌に創造した、つまり神は雄から雌まですべてを包含する存在で、その像に、雄と雌を両端とする様々なグラデーションに、男から女まで、LGBTQ+に人を創造した、ということです。人はすべてその多様性において神の像であって、そこに上下はない、ということです。

バプテスマにおいてキリストを着て、その中に入り、皆が「一人」になる。そうすると、ユダヤ人とギリシア人〔異邦人〕という民族性による差別も、奴隷と自由人という身分による差別もなくなる。雄と雌〔雄から雌までのすべて〕というあらゆるジェンダーの差もない。このスローガンとも言うべきバプテスマの定式はパウロ以前に存在していて、ユダヤ人とギリシア人の差別の廃棄を主張し、異邦人伝道を積極的に進めている七十人訳を使うギリシア語を話すユダヤ人キリスト者たちが語り始めたと思われます。そこで起源はおそらく、使徒言行録6:1 以下に言及されている「ヘレニスタイ」、エルサレム原始教会の「ギリシア語を話すユダヤ人」です。「大迫害」（使8:1）の後散らされて、その人々がアンティオキア教会でバプテスマの定式として使っていたのをパウロが受け取ったものと推測されます。そして彼はこの定式をガラテヤやコリントといった彼が設立した教会で宣言していったものと思われます。そこで、このヘレニスタイの流れから生まれた諸教会やパウロによって設立された教会には、男性と同じように活動し、教会員を教え、指導する女性たちが現れました。ロマ16章の挨拶のリストに、フィベ、プリスカ、ユニアといった女性たちが並んでいるのがその証拠です。



日系アメリカ人の強制収用と リドレス運動

神学部教授 才藤 千津子



この夏、私は大学から在外研究の許可を得て、アメリカ、カリフォルニア州サンフランシスコとその近郊のバークレーに滞在することができた。この地域は、30年前に私が神学を学んだ懐かしい場所である。その時この地域の日系社会の歴史と日系女性のグリーフ経験について調査を行って以来、親しんできた場所でもある。実は、私の母方の大叔父は日系カナダ人2世で、バンクーバーの日系バプテスト教会の信徒であった。私の親族には、第二次世界大戦中に日系人強制収用を経験した人たちがいるのである。

日系人のリドレス（「不正を正し、損害を補償する」の意味）運動とは、日系アメリカ人が、第二次世界大戦中の不当な強制立ち退きや強制収容に関してアメリカ政府に謝罪と補償を要求し、それに勝利した闘いのことである。戦争中の人種差別政策により、在米日系人は財産や住む場所を失っただけではなく、日系人としてのアイデンティティと誇りが否定されるのを経験した。

この時期、カリフォルニアの日系キリスト教会も壊滅的な打撃を受けたが、日本での宣教経験のある宣教師やクエーカー教徒など、危険を冒して日系人を支援し続けた白人たちが存在したことは特筆すべきであろう。また、戦後の日系人名誉回復に影響を与えた出来事として、日系人の第442部隊が、ヨーロッパ戦線で多くの犠牲者を出しながらも目覚ましい活躍をしたことも有名である。

戦後、リドレス運動が広がってゆく過程で大きな影響を与えたのは、1960年代アメリカで盛り上がった公民権運動やベトナム戦争反対運動に参加した若い日系人3世たちであった。日系人たちは、自分たちが中国系などを含めた「アジア系移民」であるという自覚を深め、アフリカ系など他のマイノリティ・グループと連帯して行った。そうして日系人リドレス運動はアメリカ社会から広く共感とサポートを得て行ったのである。

この時期のアメリカ社会や教会には、人種やエスニシティ、世代を超えた「人権」尊重の意識と対話の努力があった。そして、それが日系人の運動を背後から支えた。その意味でリドレス運動は、単なる金銭的な補償の問題ではなく、人間としての尊厳を踏み躪られた日系人たちの尊厳の回復と、差別のトラウマの記憶からの解放の歩みであった。日系人たちは、長い間の沈黙を破って収容経験について語り、自分たちへの非人道的な扱いに抗議の声を上げたのである。

歴史は、私たちに、戦争が始まる前には必ず広範な人権侵害や情報統制が起こるということを教えてくれる。その意味で、今回私は、現在のアメリカの状況を大いに危惧している。しかし現在、日本にも外国にルーツをもつ人々がたくさん居住している。その人たちの人権が踏み躪られることがないように、日系人や日系教会の歴史から学ぶとともに、日本社会の動きをも注視してゆきたいと思う。

参考文献：油井大三郎『日系アメリカ人：強制収容からの〈帰還〉——人種と世代を超えた戦後補償運動』
岩波書店、2025年

変わるところから、変わる (時が良くても悪くても)

神学部教授 濱野 道雄



今年は沖縄での開催でした、「平和学校」に神学部の学生と共に8月、行ってきました。「台湾有事」が煽られ、歴史が誤って伝えられる今、韓国、中国、日本（ヤマト、ウチナ）の学生たちが直接出会い、親しく語り合い、殺しあう理由などどこにもないことを確認する時でもあります。韓国の学生たちと話していると、政治への関心の高さや参与を感じます。今回であった学生たちも、前大統領による「戒厳令」に抗議するデモに参加したといえます。

私も福岡で2.11や8.15の集会、あるいは沖縄の基地や排外主義に反対するスタンディングに関わっていますが、参加者の多くは私より年上です。いえ、私だって今年還暦ですし、死ぬその時まで平和を求め、祈ることが許されることは何と素敵なことでしょうか。ただ若い人たちに何かを伝えることに失敗してしまったのでは、と自分の責任を思います。それは声を上げれば実際に社会が変わることを80年代以降経験してきた韓国の人々と、声を上げても何も変わらないことを70年代以降見せつけられてきた日本の人々の違いかもしれません。あるいは若い人々は「主戦場」を路上ではなくSNSに移したということかもしれません。

同じく8月のはじめ、韓国のハプチョン、スウォン、ソウルも訪れました。敗戦後80年を迎え、在韓被爆者への補償を求め、原子力兵器と原子力発電に反対する市民による3つの集会に、世界中から招かれた核被ばく者と共に、広島の被ばく二世としてシンポジストをつとめました。市民の集会ですが、韓日反核連帯というキリスト者によるグループが多くを準備してくれました。そのメンバーの殆どが、韓国側も、日本側も私より年上で、長年牧師として働き引退し、今はこの運動に尽力している、といった方が多くいらっしゃいました。ただその集会には韓国の若い人々も多く参加していました。

その引退牧師たちに、なぜ皆さんはこんなにアクティブで、若い人もそこに参与しているのか尋ねました。すると韓国の牧師たちは、「80年代の民主化闘争の中、支援してくれた日本の教会に教えられた」というのです。

何をやっても変わらない、ことはない。ただし、自分の力で変えるのでもない。世界のどこかで、誰かが見ており、世界は変わるところから変わる。神のみ旨のままに変わる。

この時代、教会の在り方を考え直す時だと思います。そしてあれこれやってみるけれども、それによって何かが変わるという保証はありません。例えば「日本にくる留学生や移住労働者が礼拝に来てくれるのは嬉しいけれど、何年かで異動するし、経済的なことを期待するわけにもいかない」という声もききます。それでも、寄留の民と共に棲もうとする諸教会に敬意を表します。いえ、変わるのです。その人たちが帰国して、世界が変わるかもしれません。変わるところから、み旨のままに、神の国はやってくるのです。

「振り返り、見通して」 — アジア青年平和学校七年の歩み —

神学部教授 黄 南徳



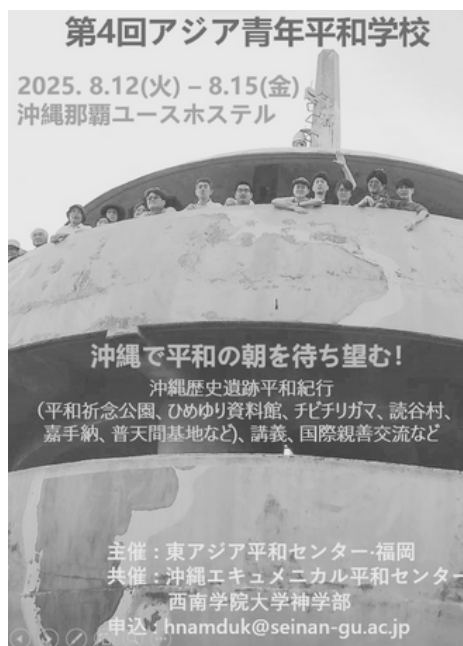
2019年に始まった「アジア青年平和学校」（以下、平和学校）は、本年で7年を迎えるに至った。コロナ・パンデミックにより中間に空白はあったが、第1回を沖縄で始め、第2回（2023年、済州）、第3回（2024年、鉄原）を経て、第4回を再び沖縄において開催するに至った。主題も一貫して平和であった。

平和という言葉は、耳にするたびに力と勇気を与えるが、現実の今日を思うと重い心を抱かざるを得ない。とりわけ東アジアの状況は、果たして我々が平和を実現し得るのかという深い懐疑の念すら抱かせる。日本は「積極的平和主義」の名の下に自衛隊の活動を拡大し、中国と台湾との微妙な関係は続き、南北朝鮮の関係はこれまでになく硬直しているのである。また米国も「MAGA: Make America Great Again」の標語の下に「アメリカ・ファースト（America First）」政策を掲げ、アジアをはじめとする諸国に高関税を課し、自国の利益のみを追求する巨大な恐竜のごとく君臨している。

このような状況の中で沖縄において開催された平和学校は、これまでになく特別な意味を有していた。幾度も訪れた地ではあるが、辺野古において米軍基地建設に反対する住民の叫びは、今なお響き続けている。それは、平和祈念公園の「平和の礎」に刻まれた戦争犠牲者の名をあらためて想起させるとともに、チビチリガマで無念にも命を落とした人々の声を普天間基地において再び聞かせるものであった。今日もなお生々しく響いてくる沖縄民衆の叫びは、国境を越えて平和を希求するアジア民衆の抵抗の象徴となっている。

振り返れば、沖縄・済州・鉄原は、単に平和学校の開催地にとどまるものではない。これらの地は、民衆の犠牲と痛みが刻まれた歴史的な場所であり、同時に、もはや埋もれさせることのできない過去の傷を記憶し、平和と正義のために立ち上がっている抵抗の地である。平和学校は、この地において今後も歩みを止めることなく、歩み続けていくであろう。

「速く行きたければ一人で行け、遠くへ行きたければ共に行け」（If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.）という言葉がある。我々は遠くへ行こうとしている。時には困難により一時歩みを止めることもあろう。しかし、決して放棄することなく、平和を目指す長き旅路を共に歩んでいくのである。



「ときどきご機嫌です。不思議です。」

神学部講師 藤方 玲衣

ごきげんよう。

「ごきげんよう」は、「ご機嫌よくお過ごしですか」からきているようで、相手の心身の健康への祈りが込められている挨拶だということです。会った時、別れ際、夜でも朝でもいつでも使えますし、ことばの響きが丸みを帯びているような気がして、わたしはこの挨拶が好きです。

「健康」とは、心身が健やかな状態の表現です。ともすると、昨今の健康ブーム的な意識のように、「死」や「病気」をなんらかの失敗と捉えて敵視するような構図が浮かぶかもしれません。元気でいなければならない、不健康は自己責任だから……と、健康へと追い立てるような商業広告や言説が溢れています。健康への強迫観念に苛まれているようでは、心が健やかで「ご機嫌よく」いるのは難しくなりそうです。いつまでもばきばきと歩くためにはこれを飲んだらいいとか、ずっと頭がしゃんとしているためにはこうしたらいいとか、いろんな言説が渦を巻いています。そんなことは生物には不可能ですから、人間という生物種を辞めろと言われてるようにわたしは感じます。生物として心身ともに健康であるとはどんなことか、「ご機嫌よく」過ごすとはどんなことかな、と時折考えます。

こ（2025年）の夏は大変な暑さでした。観測史上最も（この形容もさほど珍しくはなくなってきました）暑い夏だったということです。鳥もあまり姿をみせず、鳴き声も聞こえませんでした。いろんな生物にとって厳しい環境だったのでしょう。わたしも生物の一員として、音を上げてしまいました。熱と頭痛、関節炎で臥せっているとき、「あー、ウイルスがわたしの体でなんらかの活動をしているのだなあ」と考えました。いろんなところに様々ないのちが存在しているんだとしみじみ思いました。わたしの免疫のはたらきによって、いくつのウイルスがいのちを終えたのでしょうか。わたしもいつかのちを終える、それはほんとうに自然なことなのだと感じます。

現代西洋医学の見地からいえば、わたしは心身ともに「元気」（病気なく活力に満ちている状態）とは言えないでしょう。あちこちに不具合があり、いろんな助けを必要としています。ですが、「ご機嫌よく」ないかと言われれば、そんなこともないかなと思います。ときどきご機嫌です。不思議です。

「ごきげんよう」には、「あなたがご機嫌であるように」との祈りが込められています。機嫌のよさや元気を押し付けることばではありません。「祈り」と「押し付け」とは違うなあ……と感じた夏でした。

ごきげんよう。

佐賀バプテスト教会での研修中、早天祈祷会で共に祈りを捧げる機会をもてました。マルコによる福音書1章35節の「イエスは、朝早く、まだ暗いうちに起きて、人里離れた所へ行き、そこで祈っておられた」という御言葉は、イエス・キリストが神との交わりを何よりも優先されたことを示しており、早天祈祷会はその模範を具体的に実践する場でした。

イエスが人里離れた所で祈ったように、私は日々の喧騒から離れ、神の御前に静まることを学びました。その経験から、1日の歩むべき道が示されるのを感じました。また、私たちは詩編5篇3節の「主よ、朝、私の声を聞いてください。朝、私はあなたの前に備えをします。そして、見守ります」という御言葉を、この祈祷会を通して実感しました。早朝に神にすべてをゆだね、その日の備えをする姿勢は、信仰生活の基本であり、この時間を共に過ごすことで、私たちは互いの信仰を励まし合い、強めることができました。

佐賀バプテスト教会での早天祈祷会は、聖書の御言葉が単なる文字ではなく、私の信仰生活を実際に形作る力を持つのを感じました。そして、夜明けに祈るイエスの姿に倣うことは、私の日々の信仰生活に規律と目的を与えてくれました。

この研修を通して、私は神の御言葉を頭で理解するだけでなく、心と体で受け止めることの大切さを学びました。佐賀バプテスト教会と送り出して下さった西戸崎キリスト教会の皆様のご支援と、祈りによって支えられた研修の中で、私は信仰の基礎がどこにあるのかを再確認することができました。この経験は、将来、私が牧師として奉仕する際、御言葉を語るだけでなく、それを実践する者となるための、かけがえのない財産となりました。



神学生として、また大学生として初めての夏休みの中であった。私は様々な研修や集会に参加し、多くの貴重な学びを得ることができた。このような神の恵みと多くの方々の支援の中で、訪問することのできた場所の一つである韓国での学びと、その中での汝矣島浸礼教会学生キャンプでの恵みと経験を分かち合いたい。

8月5日から十日の間、私の推薦教会である大阪中央教会の学生らとともに韓国を訪問した。5日から7日の三日間は汝矣島教会の水曜礼拝に参加したほか、韓国における伝道の歴史や、韓国という地での伝道に尽力した数多くの牧師、伝道師らについて、彼らの墓地を含むいくつかの施設を訪問しながら学ぶことができた。現在、日本の人口におけるクリスチ안의割合は1パーセント前後だと言われている。これに対して韓国の人口におけるクリスチ안의割合は30パーセント程度だと言われており、クリスチ안의占める割合が非常に多いことが分かるだろう。このようにキリスト教信仰が根付いていることに対する様々な理由は考えられるが、その一つとしてキリスト教布教初期の伝道師たちの働きを挙げることができるだろう。彼らの中には韓国で生を受けた者もいれば、遠く離れた地で生まれたにもかかわらず、神からの召命を受けて異国の地での伝道に文字通り、人生をかけて献身した者もいた。彼らを知る中で、献身者としての覚悟と召命に対してのパッションを改めて思い知らされた。私自身も神からの召命を受け、献身者としての道を歩んでいるわけだが、自身が神から示された道、すなわち歩むべき道を今一度見直すために考える良い機会になったと感じる。

8日から10日の三日間は汝矣島浸礼教会の学生キャンプに参加した。この汝矣島浸礼教会は私の推薦教会である大阪中央教会の母教会であり、日本ではなかなか見ることのできないような規模のメガチャーチだ。高層ビルをまるごと教会堂としており、特に礼拝の中でのオーケストラを用いた聖歌隊の賛美には思わず圧倒された。そのような教会で開催される学生キャンプの参加者は中学生のみで120人ほどで、学生キャンプの開催に用いられた山奥の修養館も非常に大きな施設でありながら、隅々まで清潔に保たれており、とても美しく管理されていることに驚かされた。この学生キャンプに参加した経験の中で印象に残った点をいくつか紹介しようと思う。

まずは講師の先生の熱量だ。メッセージは基本的に夜に行われていたが、クライマックスには講師の先生も感極まり、涙を流しながら学生たちへのメッセージを続けるといった光景が多く見られた。中高生という多感な時期にこのような経験を積み重ねることができると、またそのような環境が教会において整えられていることに感服するとともに、日本において中高生が信仰を形成していく上で生じる様々な課題についても深く考えさせられた。

「合同教会」である日本基督教団と私の課題

神学部リカレント生 今井 牧夫

私は別稿の通り、日本基督教団（以下、教団と表記）に属する無任所教師でありつつ、現在は西南学院大学神学部で1年間のリカレント生として学んでいます。26歳から60歳の現在まで教団教師として生きてきた経緯を振り返り、バプテスト連盟の方々にとって参考になるかもしれない、教団の現状と課題を以下に記します。

教団は1941年に当時の宗教団体法のもとで、政府が要請する戦時体制への協力の意味を含めて、30余派の諸教派が合同して結成されました。その後、1945年敗戦以降、様々な教派の離脱を経て残った諸教会によって存続し、戦後に新規設立された教会を加えて1,650ほどの教会が今日まで歩んできました。戦前は約1,000教会で戦後設立が600教会程度と言われます。

日本基督教団の教師養成機関は6校あります。改革長老派の傾向を重視する教団立の東京神学大学と別に、教団認可神学校5校があり、私はその一つ同志社大学神学部を卒業して教団の牧師となりました。同志社大神学部は戦前は「日本組合基督教会」の伝統を持つ「会衆派」神学校で、その系統の教会は約300程度です。他の神学校は、メソジスト伝統の関西学院、ホーリネス伝統の東京聖書神学校、戦後設立の超教派の日本聖書神学校（夜間）・農村伝道神学校です。その他にCコースという呼ばれる3年間独学と毎年試験で教師になる道もあります。

私は前任地の京都教区で、6年間教区議長を務めた折りに教団中枢の常議員会に陪席しました。その中で現在の教団の運営の困難さを目の当たりにしました。一例を挙げると、「未受洗者配餐」を行った牧師への教団教師委員会による戒規免職（2010年）は、教団を真っ二つに割る対立を生み、現在も解決の目途は立っていません。また沖縄教区は2002年以降、見解の相違から教団総会に一度も出席していません。さらに最近では教団出版局が財政悪化により大幅な業務整理が必要となりました。こうした大変な問題が続く中、教団総会では全体の6割弱と4割強程度の人数割合で「右と左」（神学保守傾向とリベラル進歩傾向）に別れてしまい、一致して宣教しようという気風が乏しくなっています。とはいえ、教団には17教区があり、それぞれの教区内での教会の伝統は様々で、関西・北海道・九州などではリベラル派が逆に教区内で多数派なのです。そのために教団と教区の意思決定が正反対になることがしばしばあって問題になります。

私自身は同志社神学部出身者として、教団の多数派の中心である改革長老派とは違った「会衆派」の教会運営に関心があり、神学的にもリベラル（自由）を好んでキリスト教の学問的研究と人権平和思想の尊重を志します。その一方で私は、聖書に証されるキリストの福音により神様が人間を救ってくださるという「キリスト教伝道の意味そのもの」については、右にも左にも偏らず「神の子イエス様その人」に従うことを願う者です。

私の視点から現在の日本基督教団を見たときに、私が大変残念に思うのは、日本基督教団が戦前の各教派の互いの歴史や個性を尊重しあう、対話的で開かれた「合同教会」の性質を形作ることができなかったことです。教団は会議制ですから多数決で事柄を決するのは当然です。しかし、教派間の違いなど神学的・信仰的にデリケートな事柄は、単純な多数決では解決できないこともあります。私が気になるのは、教団総会において多数決で勝った側が、「負けた側とどう一緒に歩むか」をあまり考えていないように思えることです。教団の多数派についていけない少数派の教会は、どう歩んでいけばいいのか。これが教団における私のこれからの課題となるかと思います。

現在、西南学院大学でバプテスト教会の歴史を含めて、様々な神学的課題を自由に学ばせていただいていることに心から感謝しています。私の愛する日本基督教団をもう一度見つめ直して参ります。

特集記事

京都バプテスト医療団研修

大学院神学研究科博士課程前期 1 年 長尾 基詩

9月1－5日の間、西南学院大学院の集中講義「臨床牧会実習」にて日本バプテスト医療団で5日間の実習を経験させていただきました。西南学院大学の神学生として石原さんと私、長尾の2名でお世話になりました。日本バプテスト医療団は京都市左京区北白川にあります。病院や、老人保健施設を含んだ総合的な医療を提供する歴史ある施設です。「臨床牧会実習」では5日間、医療団内の施設に宿泊させて頂き、病床、老人保健施設居室訪問を行い、牧師室を始めとした病院スタッフの方々の講習を受けます。それらの豊かなプログラムを通して将来現場に出た時に必要な実践的な学びをすることができました。

神学部で牧会について学ぶことができる授業は臨床牧会実習以外にも、牧会学、牧会心理学、実践神学等でその内実がカバーされています。しかし、基本的には教室の中で行われる授業スタイルにおいて、理論的なことを深めることはできますが（それは実際とても重要なことであると、実践を通して実感することになるのですが）、実際の現場により近い形で学ぶことができるのが、この臨床牧会実習の特徴だと言えます。日本バプテスト医療団にはチャプレンを含めた牧師室スタッフが在籍しています。この牧師室が主となって様々な実習の事柄を準備して下さいますし、事前事後講義の講師として宣教研究所の方にもお世話になりながらその道の専門家に丁寧な牧会指導を頂くことができます。専門的なカウンセリング技術から、宗教的ケアをする人の心構え、病院や老人保健施設といった医療施設での実際の利用者さんとの関わり方、同じ現場で働く職員の方の牧会的ケアなど多岐にわたる知識と経験が牧会には必要であることが身に沁みてわかりました。

病院の患者さんとの関わり方を学ぶ、と一言で言っても、そこに入っておられる方々はそれぞれ独特の背景を持っておられます。歩くことができる方もおられれば、1日の大半をベッドの上で過ごす方もおられます。骨折などの外傷からの痛みを感じておられる方、内科の問題で食事を取ったり、日常の事柄をこなしたりするのに難しさを感じておられる方、ご家族のことが何よりの心配事になっておられる方、大切な家族を亡くした悲しみを抱える方、入院という事柄を人生の転機と捉え、何か新しい霊的発見を求めておられる方など、本当に様々な顔を医療施設では見ることができました。それぞれの事情や、抱えている痛み、心配事から希望までを丁寧に聞き取り、あるいは読み取りつつ、人と共に生き続けたイエス・キリストの姿に倣って、愛を持って寄り添うということを貫徹するのが牧会者の役割なのだと思います。そしてこれは決して瞬間的な出来事ではなく、継続的に、何年も何十年もかかっていく繋がりを紡いでいく行為なのだと実感させられました。

実際の実習現場では、丁寧に準備していただいたプログラムに沿って実習が進められます。事前講義から特定の人に面談をし、逐語録を作成するという課題が与えられます。これは15分程度の会話を1対1で行った後、それらを記憶したものを一字一句再現して会話の台本を作るように書き起こすというものです。そして発話された音声だけでなくそこには括弧の中に注記しておく形で面談者が気づいたこと、内面の心情に何かが起こったのではないかという兆候や、面談者自身の心が会話の中でどのように動いたかなども記しておきます。なお、これにはあくまで面談をしていただく方（実際の実習では患者さん）が第一、という原則を守るため、録音機などを使用することはできません（録音するという行為自体は面談者の目的のためだからです）。これだけでもなかなかハードな課題ですが、実際に会話を行った記憶を元に記録を起こしていくというのは自分の中に再びその会話を生き生きと起こしていく作業であり、ここでこうしておけば良かった、という後悔や、あの時のあの表情には実はこんな意味があったのではないか？自分としては感じ取ることでできなかった自分自身の心の動きが実は面談の時に無意識に現れていたのかもしれない、など多くの気づきが与えられるとても豊かなものです。事前講義で初めてこの逐語録の作成方法について学び、実習でも逐語録を軸に学びが進められていくわけですが、これを通して成長を実感させられました。こう感じたのは私だけでなく、実習の分かち合いの中で共に受講した石原さんもまた同じようなことを仰っておりましたし、実際に何年間も医療の現場で働きながらこの逐語録を作成し、分析を続けていたという方が牧師室にもおられました。

私たちが牧会と呼ぶものはとても奥が深く、学び、実践し、分析し、また学び、実践し、分析するというプロセスを繰り返していく必要のあるものです。そしてできることなら、そこに他者（牧会という点で強調するならばそれは何よりイエス・キリストにおける他者です）の視点が介在し、相互に建設的な批判を加え合うことで生きた学びになり、成長を実感できることと思います。講師の先生にも教えられたように、実際の現場に出てからが本当の学びのスタートであり、ここには牧会するもの同士のネットワークも重要になってくるのだと考えています。まだまだ学びの途上にある者としてはありますが、今年はとても良い経験をさせて頂きました。医療団施設の患者さん、利用者さん、牧師室をはじめとした職員の皆様方、宣教研究所の方々、共に学んだ石原さん、授業履修者が個人的に面談をお願いした方々、この実習に関わってくださった全ての方々と主なる神様に感謝致します。

この表題は、昨年度、『道』編集委員会から依頼されたテーマでした。福岡で教会生活を送る者として、当然「バプテスト教会」の存在は身近でした。しかしそれほど濃密な交わりがあったわけではありませんでした。昨年の段階では、まだ西南学院大学神学部での学びを始めてから半年で、とてもこのテーマで文章をまとめるのは難しく、違った題で文章を書かせていただきました。しかし、それから1年経ち、バプテスト教会のことも少しずつ分ってきましたので、今の私から見たバプテスト教会について書かせていただきたいと思います。もちろん、批判するためではなく、違いを理解し、それを尊重する、言わば「エキュメニカル」な意識のもとで書かせていただきます。

バプテスト教会の母胎となった人々はイギリスのピューリタンたちでした。彼らは、メアリー1世の治政下に大陸へ亡命し、改革派の中心地で学んできた人たちでありました。そのため、ピューリタンの神学の骨格は、カルヴァンの改革主義神学であったのです。その後、ジェネラル派、パティキュラー派と、この2つの源流に若干の違いは見られますが、カルヴァンの改革主義神学を基盤としていることは共通しています。その点、私たち改革長老教会の伝統と、基本的な神学的立場は共通していると言えると思います。

違いは、基本的に教会論に関する点にあると思います。バプテスト教会は各個教会主義の立場を取り、受洗に先立って各人の信仰の告白が求められます。また各個教会がそれぞれの信仰告白を持っています。日本キリスト教会は、対照的に、全体教会として「日本キリスト教会信仰の告白」を持ち、受洗にあたってこれを誠実に受け入れることを誓約します。私は西南学院大学神学部に進学するまで、「証し」をしたことがありませんでした。今年バプテスト教会で説教を依頼された際、「証し」の要素を入れるように依頼がありましたが、それゆえ私はたいへん戸惑いました。

また、洗礼が浸礼であること、また小児洗礼を行なわないこと、はバプテスト教会の大きな特徴ですが、これらについては、あまりにもよく知られていることですし、ここで詳述する必要も無いことかと思えます。

もう一つだけ大きな違いとして感じたことを書かせていただきたいのですが、それは牧師として就職する際にバプテスト教会では教師試験を行なわないということです。日本キリスト教会では、神学校（神学部）を卒業しますと、教師試験を受験します。合格すると伝道師としての働きが始まります。2年以上の経験を経て、教師試験を受験します。そこで全科目合格すると、正式に「牧師」として就職することができます。こうした点も教会観の違いから来ることと言えるでしょう。

このように違いもあれば共通点も持つ教会同士、今後の宣教において協力しながらともに働いていくことができることを願っております。

神学生 紹介

神学生を振り返って、 そして今



神学部神学科 選科3年 石原 誠

推薦教会 常盤台バプテスト教会

研修教会 伊都キリスト教会

久留米荒木キリスト教会（10月から）

「人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。」（箴言16章9節）

最終学年となり西南神学部での今までの学びを振り返ると、神さまはその人にとって本当に必要な道を歩ませてくださるお方であるということをおぼえられます。私の西南学院大学神学部での歩みの始まりは2022年からですが、最初の1年間は神学部特別研修生として、大学的に言えば聴講生として学びがスタートしました。しかし2021年の受験した時の思いは、当然ですが神学部選科生で入学することを願っていたわけです。つまり神さまが備えてくださっていた道と、自分の思いとは違っていたのです。そしてその後、2022年度の受験で無事合格し、2023年度から正式に西南神学部選科の神学生として、本格的に主に仕える牧者となる為の学びの日々が始まっていき、何事もなく2026年の3月には卒業できるというイメージを持っていました。しかしこれも、神さまの思いとは違っていたようです。今まで大きな病気に罹ったこともない私ですが、突然の体調不良で去年の後期を休学する運びとなり、卒業も半期ずれ込むことになったのです。

時折、今のこの歩み自体を疑う思いもよぎりましたが、不思議とそれはすぐにかき消されて、むしろ神さまが私に求めている“Only One”の牧者としての歩み、そのご計画に思いを巡らすことの方が増えて、主が石原誠用に備えてくださった学びが、困難な中でも順調に与えられていることに気づかされて、感謝が込み上げてくるようになっていったのです。主は、いつどんな時も共にいてくださり、必要を与えてくださる、主の恵みがいつもそばにあるという事を改めて実感させられて感謝しています。

「わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこそって／聖なる御名をたたえよ。

わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

主はお前の罪をことごとく赦し／病をすべて癒し

命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け

長らえる限り良いものに満ち足らせ／驚のような若さを新たにしてください。」

（詩編 103編 1-5節）

主は私に病を通して、自分自身の中に無意識的に潜んでいる「傲慢さ、高慢さ」を気づかせてくれました。それは自分でも見たくない“不快な自分”でもあるのです。しかし神はその“不快な自分”に手を差し伸べつつ、そこから見えてくる、今まで覆い隠されていた自分の成育歴の中でついた根深い“傷”にも気づかせてくれたのです。そして主は、今も現在進行形でその“傷”の痛みや悲しみに触れ、癒してくださっているのです。私の中で、イエスさまの言われた「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（マルコ8:34）の言葉が全身に響き渡っています。そしてその歩みが

自分の力ではなく、主によって建てあげられているという確信が与えられ、イエス・キリストの十字架の出来事が、今まで以上に自分事となって心に沁みわたってくるのです。

これまでの学びを経て最終学年となった今、率直な思いを言うなら「不安」と「恐れ」です。それは、自分に自信が持てないという事からです。私は神学を学び、牧者となる学びをすればするほど恐ろしくなってくるのです。自分では背負いきれないほどの“力”を持ってしまうような怖さを感じるのです。そしてその“力”は諸刃の剣で、人を救う事も出来れば傷つけてしまう事もあり、またその“力”には、いつも誘惑がつきまとっているからです。その“力”と共にある責任の重さに締め付けられるような苦しさを感じてしまうのです。

しかしこの苦しみこそが、神さまが私に、神学生の学びの最終段階で伝えようとしていることのように思えてならないのです。この重責を忘れないように心に刻み込み「牧会に出よ」と命じられているように思われるのです。

「肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。」

(ヘブライ人への手紙 12章10節)

自分に自信が持てないという苦悩は、私にとっては必要なことなのでしょう。パウロに棘があるように私にも棘がなければならないのです。今年の病はその為であり、その気づきの時間が、主によって備えられていたのだと信じています。そして、その経験があるからこそ、自分の力や努力ではなく神さまに委ねて神さまと協働し神さまと共に歩むことを、心から望むのです。

今後について決して大きい事は言えませんし、弱音を吐いてしまう時があるかもしれませんが。しかし主が私を引き上げてくださっている以上、その事を誤魔化して無難に生きる事は出来ません。

「苦しみに遭ったのは私には良いことでした。／あなたの掟を学ぶためでした。」

(詩編119編71節 聖書協会共同訳)

実際に神さまが私をどこへ導かれるのかは分かりませんが、私は神さまを信頼しています。与えられた苦悩は、必ず癒され、御心に沿った希望の歩みへと変えられていく“恵み”だと信じています。そしてその事は多くの人々に、特に今この世で生きづらさを覚えている多くの人々に証しとなり、その喜びを共に味わい、主に栄光をお返ししたいと願っています。

「光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった。」

(ヨハネによる福音書1章5節 聖書協会共同訳)

私の人生の歩みにおいて、み心になりますように・・・。

言葉によって生きる

大学院神学研究科博士課程前期1年 長尾 基詩

推薦教会 府中キリスト教会

研修教会 長住バプテスト教会



日々、神学生の歩みに心を留め、祈りによって支えてくださる、全国諸教会の皆様に感謝致します。皆様の支えの上に神学生として守られ、5年目の学びを迎えることができおります。

教会の宣教の業について、考えさせられています。主の宣教の主体として私たちは立たされています。その際に具体的に私たちは何を行いたいのか？どう世にあって教会共同体が生きたいのか？教会に連なる一人ひとりが今まさに問われているのではないのでしょうか。これに対する応答は、私の教会生活、神学生、あるいは一キリスト者として与えられる出会いによれば、世代間、教会の置かれる背景によって少しずつ異なってきます。しかし、その中で「聖書をもっと読みたい」という声がしばしば世代、教会を超えて挙がってくるのは喜びの事柄だと思います。特に青年世代にその声が特に多く感じられるのは、興味深いことです。聖書とどう向き合うか、はバプテスト教会が大切にしようとしてきた問題です。この意識が青年世代に根付いていることは、歴史の中で、教会の中で育まれてきた信仰の息吹を感じさせます。

聖書学を専門として学んでいくうちに、バプテスト教会が大切にしてきた「聖書」について思われることがあります。学問としての聖書学が問題とするのは「聖書」です。当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、聖書学が問題とするのはあくまで徹底的に「聖書」なのです。これには間違いなく確固たる価値があると私は信じていますが、おそらく、教会の中で聞こえる「聖書をもっと読みたい」という願いを聖書学は完全に満たしてはしないでしょう。かれらが欲しているものはここにはない。数多の注解書を積み上げても、それが自分と聖書の言葉とを隔てる壁となっていく感覚を私も確かに感じたことがあります。

バプテスト教会において大切にされてきたものは「聖書」と、そこに証されている言葉に魂を尽くして向き合い、問われ、応えることを促される「自分」との生きた関係ではないのでしょうか。私が説教を終えてかけてもらった中で最も嬉しかった言葉は「聖書にはこんな言葉があるんだ」です。もし、聖書にその人にとっての光が今まさに差し込もうとしているとしたら、その人の両目がそこに向かって上げられたのだとしたら、これほど嬉しいことはないのです。

私たちは死んだ言葉の羅列に接したくて、あの膨大なページをめくるわけではありません。生ける神の、生ける言葉に深く聴き、そこから生きることを望み、希望を持って、あの1945ページの中に飛び込んでいくのです。

神の揺さぶり

神学部神学科選科2年 大野 学

推薦教会 釧路キリスト教会

研修教会 西戸崎キリスト教会



私にとって、西南学院大学神学部での生活は、単なる知識の習得に留まらず、ボンヘッファーの著書『共に生きる生活』が説く「神の揺さぶり」を体験する場であった。この揺さぶりは、人間が主体となる自己中心的な信仰（エロース）を打ち砕き、より深く、イエス・キリストと繋がる本質的な信仰（アガペー）へと導くためのプロセスであった。神学部での学びと共同体生活を通して、私はこの神の揺さぶりを神学部での学び・神学寮での共同生活・研修教会での奉仕から深く実感した。

神学の学びでは、聖書の御言葉や教会の歴史を深く探求する過程で、自分の信仰の前提が揺らぐことがある。これは、私の場合、無知から派生する盲目的な信仰から脱却し、より確固とした信仰を築くために不可欠な過程であった。西南学院大学神学部での講義を通して、私は信仰の先達の多様な解釈や批判的な視点に触れ、自分の信仰を客観的に見つめ直すことを迫られた。この知的探求による揺さぶりは、信仰を感情的なものだけでなく、理性的なものとして、言葉で整理し、捉え直す必要性を私に気づかせてくれた。

神学寮の共同生活は、ボンヘッファーが説く「共に生きる生活」の核心である。学年も背景も異なる学生たちが集い、共に学び、祈り、生活する中で、私たちは互いの弱さ、そして長所・短所に直面させられる。この摩擦と葛藤は、決して心地よいものではないが、真の愛と赦しを言葉だけでなく、現実の関係性の中で実践することを迫る、まさに神の揺さぶりである。私たちはこの揺さぶりを通して、キリストの体として互いに支え合い、赦し合うことの重要性を学ぶ。

研修教会での奉仕は、私たちの信仰を具体的な愛の実践へと導く。教会での働きを通して、私たちは様々な人々の苦しみや弱さに触れる。この経験は、自分の信仰がいかに未熟で、教会員の方を導くには能力不足を痛感させられる。しかし、同時に、それは神の恵みが私たちの弱さの中でこそ十分に発揮されることを実感する機会でもある。この奉仕による揺さぶりは、信仰が自己満足ではなく、他者への奉仕として用いられるべきものであることを、私に強く認識させた。

西南学院大学神学部での生活は、ボンヘッファーが掲げた「共に生きる生活」を、現代において実践する場であった。神学部での学び、寮生活、そして研修教会での奉仕から受けた神の揺さぶりは、私の信仰を揺るぎないものとし、将来、主の福音を伝えるための確固たる土台を築くための必要条件であった。それは、私にとって単に神学の知識を身につけることなく、キリストを中心とした愛と奉仕の共同体の中で、真の自己を見出すものであった。

目標を目指してひたすら走る



神学部神学科4年 伊藤 健一

推薦教会 日本キリスト教会福岡城南教会

研修教会 日本キリスト教会福岡城南教会

昨年4月、定年退職を機に西南学院大学神学部にて学士入学して神学の本格的な学びを始めたばかりですが、2年目となり、現在は4年生、最終学年となりました。それまでの教員生活から全く違った生活になりましたが、学生さんたちからも普通に受け入れていただき、楽しい学生生活を過ごしています。神学部での学びは非常に過酷で、相当の時間をかけて予習や復習をしないと間に合いません。昨年は、概論科目を中心にヘブライ語ⅠとⅡ、ギリシア語ⅠとⅡの履修を終え、本年度は専門科目を本格的に学んでいるところですが、卒業論文を並行して作成していかないといけないので、その両立には努力と工夫が必要です。

私は神学部で学生として学ぶ一方、昨年3月まで勤めていた北九州市立大学で、今年も非常勤講師として週1時間だけ大学院の科目を担当しています。大学院の科目なのでどうしても担当しなければならなかったのです。また、所属する日本キリスト教会の神学校委員も務めています。こちらは任期3年ですので、再任されなければ今年の10月で退任することになります。こうした務めを負いつつ多くの授業を受講しているので、神学部の先生方からご心配していただいているのですが、何とかして第2学期を乗り切って無事に卒業したいと思っています。

日本キリスト教会神学校には、本年度は1年生と3年生の学生が一人ずつという状況で、献身者が非常に少ない状況にあります。西南学院大学神学部の方も、神学コース生に限ってみれば同じ状況ですが、キリスト教人文コース生の皆さんが多くいらっしゃって、彼らからも少なからず刺激を受けています。また本年度は、神学校週間の6月に、大牟田バプテスト教会と春日原バプテスト教会で、2週連続で説教奉仕をする機会をいただきました。以前、学生を引率して英国文化研修のプログラムを実施したとき、私の滞在先のご家族がバプテスト教会の会員でしたから、私もここで礼拝を守ることになりました。ですから、イギリスではバプテスト教会にお世話になったことがあるのですが、日本でバプテスト教会を訪れるのはこの時がまったく初めてでした。緊張しましたが、幸い温かく歓迎していただき、感謝に堪えません。

昨年記しましたように、私が神学部で学びたいと考えた動機は、多くの無牧師教会の存在でした。神学部に進学する以前にも、長老として他教会で説教することがありましたが、その質を高めたいと思ったのが直接的な動機です。西南学院大学神学部では、そのために必要な教育がなされ、遅く献身した私のような者にも質の高い高度な学びを提供していただけていることを改めて感謝しております。皆さまにも祈りに覚えていただいていることを改めて感謝申し上げます。

支えの中で

神学部神学科 1年 渡辺 鷹優

推薦教会 大阪中央バプテスト教会

研修教会 西南学院バプテスト教会



神学生として、また大学生としてもはじめての事ばかりで多くの良い刺激を受けた一年前期も終わり、夏休みに入りました。振り返ると大阪から福岡へと移住し、初の一人暮らし。様々な文化の違いや生活の変化を毎日のように感じながら、それでも新鮮な毎日がとても楽しかった4月。大学も本格的に始まり、アルバイトや学友たちとの交流など、より様々なことに取り組んだ5月。大学にも慣れはじめ、あっという間に6月も終わり、気づけば7月の期末試験の対策に追われるような大忙しの大学生活でした。平穏な夏休みが訪れるかと思いきや、試験が終わってから2日後には大阪へ帰省し、韓国への教会訪問、全国青年大会への参加、と大忙しな夏休みの幕開けとなりました。

学びの面においては、大学での講義はもちろんのこと、研修教会での学びや奉仕を通して得た経験、夏休みの中では、韓国における宣教の歴史や学生キャンプを通じての学び、全国青年大会では様々な職業、背景を持つ学生や社会人、先生方と交わる時間をいただき、選ばれた聖書箇所について、それぞれの経験や考えに基づいた分かち合いをすることができ、非常に多くの有益な時間を持つことができたと感じます。

毎日を一生懸命に乗り越えつつ楽しむ事ができたこと、様々な教会や集会に参加し、たくさんの学びと経験を得たと同時に、多くの人とコミュニケーションをとることができたことを神に感謝するとともに、様々な面において支えて下さった方々に心から感謝致します。



西南の神学部リカレント生としての 恵みに感謝します！

神学部リカレント生 今井 牧夫

推薦教会 日本基督教団 京北教会

研修教会 日本基督教団 福岡警固教会



主の御名を讃美いたします。私はバプテスト教会ではなく日本基督教団に属する60歳の牧師（無任所教師）であり、現在は西南学院大学神学部の新制度「リカレント生」として1年間在籍する者です。

私は、今年3月まで17年間奉仕した日本基督教団きょうほく京北教会の退任を見据えて、その約1年前より、その後の進路を検討していました。その際に、思いがけずネット検索でリカレント生募集を見とときに、「これはまさに私のような者のための制度ではないだろうか？」と直感したのです。そこから当時の才藤千津子神学部長に相談をさせていただきました。私は26歳から日本基督教団の教会で34年間働いたので、60歳を契機に学び直しの機会を得たいと考えていたのです。バプテストではない日本基督教団の牧師からの応募という、リカレント制度の想定外の相談でありましたが、感謝なことに神学部教授会の許可のもとで一年間受け入れていただくことになりました。承認いただいた神学部教授会、大学の様々な関係者の方々、共に学ぶ寮生・学生の皆様、そしてバプテスト教会関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

「リカレント」とは再教育の意味で、具体的には学部聴講生・大学院科目等履修生の立場です。講義に出席してテストやレポートもあります。一年間だけですが、思う存分自由に学ぶことができます。生活は神学寮で、私は単身で2DKの家族寮に居住して朝・夕食もお世話になります。経済的には、講義登録や寮費などすべて個人で負担します。教会出席は日本基督教団の教会だけでなく、バプテスト連盟の平尾教会の大名クロスガーデン礼拝へも度々出席しています。その他、朝礼拝はじめ寮の行事参加や大学でのバプテスト史の受講などを通じて、バプテスト教会の歴史と活動も少しずつ学んでいます。毎日通学して聴講や自主学习など学びを重ねると共に、大学・寮で神学部の皆様と共に責任を持って過ごし、ご迷惑にならないように、そしてできれば皆様にプラスとなる存在でありたいと心がけています。他教派の私を受け入れてくださった神学部のご厚意を片時も忘れません。

また、寮では毎朝の学生礼拝や神学生歓迎バーベキュー、神学校日を覚える集いなどの行事に参加してお手伝いもしました。また西南学院大学教会で行われたウクライナ支援の報告会など、バプテスト連盟の行事にも出席しました。私は、バプテスト連盟の皆様の心のこめられた礼拝や奉仕、また西南学院大学神学部での教師・学生の皆様の、神学に対する誠実な研究姿勢などにとっても感銘を受けています。私が属する日本基督教団、また卒業した同志社大学神学部と似た面もあれば大きく違う面もあり、その両方から私は多くのことを学んでいます。

そのようなわけで、今年4月以降、リカレント生としての生活のすべてが恵みであると感じています。この文章を読まれたバプテスト教会の牧師の皆様、もし神様の導きを感じられたなら、リカレント生に応募なさってください。牧師の人生に必要な、「自由な学び直し」がこの学び舎に豊かに備えられています！ 祈ってご応募ください！

編集後記

全国諸教会の皆様、日々、西南学院大学神学部をお祈りに覚えてくださり、感謝します。今年も道を発行することができました。各々が綴った一つ一つの言葉を通して皆様と共に繋がり、祈りを共有することができれば何よりの幸いです。

今年度は新たに一人の新入生、二人のリカレント生（お一人は前期から、もうお一人は後期からの学びです）を迎え、神学生一同学びをスタートしました。執筆した原稿をご覧になって、日々、主に連なる教会と神学部学生を第一に考え、研究と教育に尽力する先生方の道のり、召命と献身の思いを持って西南へ飛び込んだ神学生が何を学び、何を考え、どのように神学してきたかの足跡を知っていただけたかと思います。神学生、神学部教授、それぞれが一つとなって、西南神学部の学びが成り立っております。その土台になっているのは熱き福音宣教への思いを共にする全国諸教会の信仰者一人一人のお祈りです。

この道はキリストへと続く道です。この原稿を手にとったすべての方と共に一歩を歩むことができますように祈ります。

在 主

長尾 基詩

『道』2025（年刊・第50号）

発行日 2025年12月16日
発行者 西南学院大学神学部学生会
編集・製作 株式会社 工房ヒラム

SEINAN, BE TRUE TO CHRIST.
西南よ、キリストに忠実なれ。



<https://sg-theo.info/>